

2003年度東久留米市市民自主企画講座

700年伝わる「奥三河の花祭」

(国指定重要無形民俗文化財)

東京で伝承10年

2003年9月27日(土)

東久留米市中央図書館

視聴覚ホール

午後 1:30 ~ 4:30



東京花祭り実行委員会

進行次第

1 . 「花祭り」との出会いから「東京花祭り」をはじめるまで

2 . 「花祭り」について

<資料> 「花祭りの価値とそのあり方」 後藤 淑

実演

一の舞

順の舞

足の踏み方について

三つ舞

花の舞

3 . 東京花祭り < 10年の歩み >

4 . 東京花祭りの子どもたち < 10年の活動を振り返って >

5 . 花祭りにかかわって (思うこと)

実演

四つ舞

花の舞

三つ舞

山見鬼の舞

6 . 10周年を終えて・・・今後の展望と夢

1. 「花祭り」との出会いから「東京花祭り」をはじめまで

長男が7歳、次男が2歳の1月2日、「老人の舞」「若者の舞」「子供の舞」がある祭りを見に行こうという人見のプランで奥三河・東栄町に行った。1984年、今から19年前のことである。当時は正月に何ヶ所も「花祭り」をやっていた。朝着いて6ヶ所を下見して御園地区を見ることに決め、夕方から明るくなる日の昼頃まで祭りを見た。「ねむい、けむい、寒い」だった。長男はじっくり見るほうで、次男のほうはリズムにのって体を動かし、鬼などのまねごとをする。帰りの車の中では、耳の奥で「祭りの笛と太鼓の音とテホへの囃子」がくり返しくり返し鳴っている。目の奥には「足の踏み」が焼きついてた。次の年から民舞を研究している学校の先生方と花祭りを毎年見て歩き、御園保存会から舞を教えていただく関係にもなった。次男が小学校に入った年に「花の舞」を祭りで舞わせていただいた。次の年、秋風が吹く頃になると、次男は花祭りを思い出し「足の踏み」を時々するようになって祭りを待ちわびた。昭和天皇が病気ということで、あちこちの花祭りが自粛してとりやめる中、御園は3月に延期。次男には待ちに待った花祭りである。学校を休んで練習に加えていただき祭りに参加。その祭りから帰ってきてすぐに、御園で民宿を営み無農薬のお茶を製造、販売している方(現花祭り助太夫)から「御園小学校が来年廃校になる。その最後の一年を御園に住んでみないか」とおさそいを受ける。次男は一瞬考えたが「うん、行く」との返事。一週間の舞習い(祭り前の練習)と熱気あふれる祭りの中で4人1組になって舞う「花の舞」は、子供の心に大きな何かの種を蒔いたようである。

御園小学校は男子2名、女子8名、小学3年の次男が5月から転入して11人の学校。御園の人々の愛情につつまれ、空気、景色のきれいな所、大好きな花祭りの里での1年近い生活。村あげての一大行事=運動会など村の活気の発信源である小学校がなくなるということは本当に悲しいことだった。次男は小学校時代、春、夏、冬とよく御園に帰った。次男にとって御園はふるさと、親のいる実家になった。祭りは土地の方々が中心で東京から参加するものはメンバーが欠けて必要なときに出させていただくのだと親子で話し合ったが村の方々は分け隔てなく引き込んでくださり、子供にとっては村の一員になったような気持ちで目いっぱい楽しい思いをさせていただいた。ある時、「自分が大きくなったら「花の舞」が舞えなくなる、「花の舞」の舞手はどうなるのだろう、東京には子供が大勢いるのにね」という次男の言葉にどきとした。

村には次男と同学年の男子が1人いて、東栄町の町中にいる外孫も2人とその友だちが加わり、にぎやかな年代が花の舞を舞っていたが、その次の世代が続いていない。私は、こんなによい「舞」を受け継ぐ子供がいらないなんて残念と胸を痛めていたので、そのときの次男の言葉が胸にずんとこたえた。ある時、御園の方から「花の舞を舞う子供

がいなくなったら、祭りもできなくなる。東栄町の中でも山奥のこの地区の祭りが次になくなるのではないか」という話を聞き、花の舞の伝承が途切れたり、絶えたり、ましてや御園の花祭りがなくなるなんてつらいことだと思った。黙って行動しなかったら後々後悔すると思った。

1993年農協主催の「民俗芸能と農村生活を考える会」に出演のため上京された御園の方々との交流会のとき、花太夫の清水さんから「本気でやるなら御園の舞を伝承することができると思う。東京の子供たちに教えてもよい」という話を伺うことができた。山とわからないことがあるけど動かなければと思い立ち、身の回りにいる民舞を勉強する方々に相談をもちかけ、身近の子供たちを訪ね、仮称「東京花祭り」を立ち上げた。
(広木)

2. 「花祭り」について

「花祭り」は、愛知県奥三河地方の山奥に約700年前に修行を積む修験者が伝えたとされる。八百万の神を勧請し舞を奉納して、生命の再生と願の成就を祈る祭りといわれ、鎌倉以来の伝統をもつ民俗芸能で、幾種類もの舞が夜を徹して繰り広げられ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

「花祭り」が催される時期は—

花祭りは霜月祭りともよばれる。霜月祭りとは年末に「衰えた魂の復活」をはかる祭りで、本来は太陽が出ている時間の一番短い時期の祭りだが、生活の変化、地域の人々の高齢化などのため、現在は11月から3月にかけて催されている。御園地区は11月の第2土曜日からあくる日の日曜日にかけて行なわれている。

「花祭り」が行なわれる地域

「花祭り」は愛知県北設楽郡の東栄町で11ヶ所、豊根村で5ヶ所、津具村で1ヶ所の計17ヶ所で行なわれている。北設楽郡は愛知県の東北端、長野・静岡・岐阜三県の県境に接していて、標高200～1000mの所にあり、90%以上が林地で、集落は山間や谷間の盆地に形成され、耕地は狭く生活は山林に依存する度合いが大きい地域で、東栄町は91%が山林、しかも人工林率は82.5%（県平均63.7%、全国平均では44.6%）という所である。

東栄町御園



経済

北設楽郡内は大小数百の山々からなり、悪い地理的条件のもと土地は極限まで利用され、段畑農業で自給自足の生活が営まれ給与・労賃と農林業、あるいは農業と林業の複合経営によって生活を営んでいるが、外国材の輸入による木材価格の低迷と林業生産諸経費の上昇などで林業経営は困難になり、過疎・高齢化・後継者難などになっている。

御園地区

御園は東栄町の町の中心本郷から車で15分位山に登った標高600m前後の所にある集落で、約50戸、人口120人ほどで、男性は50人弱、平均年齢約67歳である。祭りは地区あげて取り組まれている。一昨年 年ぶりに子ども(双子)が生まれ、ここ1,2年は外孫が何人も夏の盆の時期に御園地区に帰ってきて、東京花祭りのメンバーも加わり、村の年寄りたちから舞を学ぶようになり、祭りで舞う姿は感動的である。

花祭り試論

今回「昭和を考える会」の企画で2003年度東久留米市・市民自主企画講座に「東京花祭り」が取り上げられることになり、事前の打ち合わせを行った。東京で愛知県の花祭りをこの10年間伝承実践活動を何で続けてきたのかを知りたいと言われ、何でだろうと改めて考えてみた。

戦後の高度経済成長時代の社会変動で、農山村は過疎の地となり、伝統的な文化や祭りが衰退し後継者がいなくなっていた。一方大都市圏には、農山村から3000万人もの人々が移住し世界歴史上最大の民族の大移動の時代となった。その結果、超過密地帯が出現した。何もないとこに大勢の新住民が大挙して移り住んだ結果、伝統的な人間関係や祭や芸能を持たない都市地域が出来た。この地域の人々と、すばらしい祭や芸能を持っている地域の人々との交流が根底にはあると思う。

表面に出ている理由の一つは、「舞」を演じ伝承していく魅力、もう一つはその舞や祭を行っている現地の人々の人間的な優しさ豊かさと、祭に対する思いや関係の深さの魅力とがあると思う。

東京で続いてきた原動力としては、「子ども達」が楽しく舞い遊ぶ姿に大人達がほだされ励まされてきたことが大きい。

だがそれだけでは解けていないと思う。何で奥三河で「花祭り」が700年も続いているのか？・・・その「何か」が私たちをも突き動かしているのではないかと思えて、改めてその「何か」を探りたいと思った。

「北設楽郡史」によるとこの一帯は、「既存の政治権力の空白地帯」が主として落ち武者達により「開発私領」の形で拓かれていった地域という。先に入った郷主を頼り、血縁関係となって同族的な村の開発を進めて行ったようである。

集落の出来方の特殊性と、芸能の伝わり方の独自性（一般的には芸能は伝わることでかなり変化している。）があり、「花祭り」が各集落の成立にとって大事な役割を果たしたと思われる。

応仁の乱から戦国時代までは日本の大激動期・下克上の時代でもある。政治・経済・身分階層・文化も祭も大きく変化した時代。この時代を途絶えることなくどのようにその波を乗り越えてきたのか？

半武士半農民だった祭の主催者層・郷主達が搾取階級とならずに完全に農民化し、村の中のリーダーになっていった。その結果、武士達の戦乱に決定的に巻き込まれないで、自立自治の生活を維持出来、祭も継続出来たのではないかと思われる。

祭の柱である「神事」と「舞」は、共通の精神・思想に貫かれており、集落の一人一人の修練・鍛錬で人格を磨き、集落を担う人間形成の役割を果たしてきたと思う。

その精神・思想が、「花祭り」の700年も続いてきた『何か』に関わっているのではないだろうか。

(広木)

「足の踏み」口唱歌

ドーン ドンドコ

舞庭で舞手をはやす言葉

テホへ テホへ テホトへ テホテ

今回の実演概要

一の舞	1人で舞い、扇、鈴、櫛篁を持って舞う。巫女の舞いともいわれる。
順の舞	大人の舞で、釜の前で「ゆはぎ」をつけ4人で舞う。
花の舞	稚児の舞とも言い、花笠をかぶって舞う。
三つ舞	少年期から青年期へ移る世代の者によって舞われる舞で、3人で舞う
四つ舞	青年の舞で、4人で舞う。
山見鬼の舞	山見様ともいわれ尊敬される。供鬼を従えて、鉾を持って登場し、途中まさかりに持ち替え、返ばいを踏む。

花祭りの価値とその在り方

昭和女子大学教授 後藤 淑^{はじめ}

修験の神事芸能

第二次世界大戦前のことであつたらうか。愛知県北設楽郡下津具の花祭りを見た時、同じ曲目を何回も繰り返しやるのでうんざりしたことをおぼえている。奉願者が幾人もいて、そのために一つの曲を何回も舞うのだと聞いた。花祭りは願舞が基本にあり、それが花祭りを今日まで続け育てて来た原因にもなった。

花祭りでは一力花^{いちりきばな}という言葉を書く。それは一人の人の力で花祭りを執行することである。病魔退散・家内安全などのために願をかけ、自分の家を花宿^{はなやど}（祭場）として行うのである。花宿をすると、その家は清められ、病気もなく、家は栄えるということのようである。

花祭りを行う人は「みょうど」と呼ばれ、修験的な宗教を身につけていた人達であった。花祭り発生の村は北設楽郡東栄町大入と同郡豊根村三沢山内とよくいわれている。いずれも水田のほとんどない山の中腹に作られた村である。彼らがいつこの村に居を定めたか明らかでない。しかし、少なくとも室町時代末には、この山村に居を定めていたことは明らかである。記録によると、室町時代末ごろから、すでに今日とほぼ同じ曲目を演じていたことが知られる。

花祭りは村人の求めに応じ、ある時は民家で、ある時は氏神の境内で、それぞれ祭場を作り、そこで行なつた。元来、遊行性^{ゆぎょう}を持った宗教芸能集団であつた。民家を祭場とする時、その民家を花宿^{はなやど}というのは、花祭りを演ずる人々の遊行性を物語っているのではなからうか。

伊勢系神楽と花

花祭りは釜に湯を沸かせ、その釜を中心に芸能が行われた。天竜の神聖な水を用い、それによって穢れをはらい、清め、人々に幸せを与えようとしたもののようである。霜月神楽は湯立を中心とした神楽であるが、これは伊勢系神楽の特徴といわれる。

花祭りの花には新しい魂を体内に呼び入れ、再生を願う意味があつたようである。清め・鎮め・被い・再生の意味をもつた花祭りを村の人々は喜んで迎え育てたのである。このような宗教芸団はいろいろな形をとって、中世・近世を通じ、全国的広がりをもって行われていた。

古い猿楽

花祭りは遊行性に加えて、宗教色の強い中世的芸能が伝わっていて極めて注目される。また、山見鬼・榊鬼・ねぎ・みこ・翁などの仮面をつけての舞は、古い猿楽といってよく、芸能史料として価値が高い。花太夫と仮面をつけた舞人との問答は鎌倉時代の猿楽を思わせる。舞人が花太夫に、汝は何者で何のためにやって来たかを問われ、鬼が花太夫との問答に負けて退くという形式は、大塵見おおべしみの能面をつけて出る能の曲とも共通するところがあり、ねぎ・みこ・翁などの曲は滑稽な役がともなっていたり、滑稽な言葉などがあって、いかにも古い猿楽を思わせる。

保存への提案

花祭りは、現在、愛知県では北設楽郡を中心とした村々に17ヶ所ほど残っており、愛知県と境を接する静岡県・長野県に3ヶ所伝えられている。この花祭りと同じく、中世的芸能を伝える田楽・神楽が、愛知県・静岡県・長野県の県境地帯に重なって行われている。これらの芸能は花祭りと深い関連をもっている。この地方の神楽は霜月神楽・湯立神楽といわれ、伊勢系神楽である。田楽はこの地方の古い寺院と関係がある。湯立はないが芸能内容には花祭りと共通したものがある。このような中世的芸能が併存して残っている地域は全国的に珍しい。この中世芸能とともに、この地域には念仏踊り・盆踊りなどの風流踊りなども残っていて、一大芸能博物館的在り方をしている。花祭りとともに総合的保存が必要である。

今までは民俗芸能が、村人の信仰・娯楽と結びついており、生活の一部といってもよかった。しかし、今日では花祭りをを行う人たちが仕事を異にし、他の地域に職場を持つ人たちが多くなった。花祭りに対する考えも、信仰から次第に文化財としての価値の方向に移ろうとしている。文化財の価値の認識とその指導者及び後継者の必要であること、今日より急なるはない。民俗芸能保存会の努力は勿論だが、国も民俗芸能の技術保存に関しての考慮をはらうことが民俗芸能の保存に役立つこととなろう。

花祭りは郷土芸能である。郷土の誇りや文化財の良さは、小学生・中学生・高校生の頃から教えていくことが必要ではなかろうか。教材・実習として、社会やその他の学科の副読本として、とりあげることも必要であろう。種を蒔いておけば、必ず花を咲かすことがあろう。

(社団法人 全国農協観光協会主催)

民俗芸能と農村生活を考える会(平成5年1月30日)パンフレットから転載)

3. 東京花祭り < 10 年の歩み >

初めての「東京花祭り」

1993年9月から始まった子どもたちの練習は、小学4年生以下19人みんなが「舞上げ」から始めました。12月25日、滝山小学校の図書室で第1回（仮称）「東京花祭り」を開催しました。舞は子どもたちによる「舞上げ」、ダガスコによる「順の舞」と「舞上げ」、御園花祭保存会による「ばちの舞」、「鬼の舞」、「地固め」などでした。



舞上げで親に担がれててくる子どもたち

幼児、小学生の「花の舞」の衣装は、すべて自分たちで生地を仕入れて、型をおこして、縫って作りあげました。

湯立ての釜はダンボールで手作り

第2回「東京花祭り」から会場を西部地域センターホールに移し、12月第2土曜日に開催しました。（以後毎年西部地域センターホールで開催）舞庭の中央に置かれる釜は、父親たちがダンボールと紙を糊で貼り合わせてつくりました。もちろん水を入れて沸かすことはできませんでした。



山見鬼の舞

母親、父親も舞い始める

子どもたちの活動を支援するために最初の年に結成された「花の舞父母会」でしたが、子どもたちの練習に付き合っているうちに大人たちも舞いに興味をもち、第3回「東京花祭り」にはとうとう父親、母親たちが「順の舞」を舞うことになりました。

5周年

舞を深めること、そのため花祭についての学習をすすめました。中学生がはじめて「三つ舞」に取り組みました。「三つ舞」、「四つ舞」の藍染の衣装は、現代の体型にあわせ部分的に大きくした型をおこし、愛知県豊橋の業者に制作を依頼しました。ゆわぎは東京の業者に制作を依頼しました。鬼の面、鉞、鉾、衣装を地元の方をお願いして作ってもらいました。この年、保存会から「鬼の舞」、伴鬼、「一の舞」、「地固め」

を教えていただき、大人の舞も充実してきました。東京のメンバーではじめて「鬼の舞」、「地固めの舞」、「一の舞」、「四つ舞」に取り組みました。

東久留米市長の挨拶の他、ダガスコ、東京民舞研、民俗学研究者の方々にも、助言をいただきました。地域の方々の参加も過去最高となりました。

5周年を記念してまとめた文集が、「新日本標準教育賞」に入賞しました。

金刀毘羅神社に舞を奉納など

6回目の年、高尾山・金刀毘羅神社の秋の例大祭で、舞を奉納。8回目の年、「花しょうぶ」の茨城大学での民俗学特別講義で舞を実演。

10周年

“本場の祭り”に少しでも近づこうと初めて野外広場に出ました。最後の2時間半余りでしたが、大勢の地域の方々に喜んでいただけ、滝山名店会の方々からも、これからも広場でやりましょうとうれしい反応がありました。ホールと屋外広場の2会場の準備は大変でしたが、東京土建をはじめ地域の方々と会員の奮闘で立派に準備ができました。いままで使っていたダンボールの釜の代わりに、御園から本物の釜を借りることができました。「鬼様」をテーマとし、「奥三河の山奥から鬼様がやってくる」をタイトルにして取り組みました。「鬼の舞」についての認識も深まり、舞も衣装も大きく前進し、またスーパーヤマザキの前では、保存会の榊鬼が返閨を踏み「五穀豊穡」「無病息災」「平和安穩」を願うことができました。愛知県東栄町御園からは大型バスで40数名が参加し、応援してくれました。この10周年は、今後の「東京花祭り」のあり方の方向を一歩だせたように思います。

(千田)



供鬼（屋外広場）



中学生が舞う三つ舞（野外広場）

4 . 東京花祭りの子どもたち < 10年の活動を振り返って >

この会が発足した当時、最年長の4年生だった子どもたちは来春には成人式を迎えます。子どもたちという認識を改めなければいけないのではないかと思いつつ、子どもたちの10年の成長を思うところです。

現在、花若(中学卒業後の若者グループ)11名、中学生6名、小学生10名、幼児1名。幼児から若者までの会員は28名です。発足当時から会員も多く、子どもたちが果たす役割はとても大きなものになってきました。

(1)「舞」の伝承者として

発足当時4年生だった子どもたちは、舞を習い、覚え、次の人たちに伝え、会の中で、「舞」の伝承の先頭に立ってリードしてくれました。花祭りの舞が、幼児の舞、子どもの舞、青年の舞、成人の舞と人の成長とともにあり、構成されているため、次の舞次の舞を習い覚えていくことになります。まだまだ充分とはいきませんでした。去年は成人の舞を舞い始めるところまで来ました。御園保存会の皆さんからもこれからは大人ではなく、花若が会の子に舞を指導するようにと、アドバイスをいただいています。舞の一つ一つの動作だけでなく御園の舞の雰囲気子どもたちは大切に受け止め、舞っているようです。

(2)祭の担い手として

5周年前後から子どもたちも「東京花祭り」という自分たちの祭を作っていくことがとても楽しそうになってきました。小学生は地域の人たちにお知らせするピラを配り、祭の会場を飾る御幣やざぜちを作り、若者たちはポスターの印刷、台紙への貼り付けなど受け持ち、花若の女子は大人たちと衣装作りや舞道具の修理など、準備の段階からも楽しみながら参加するようになりました。また当日は会場の準備、片付け、御園からのお客様の接待など舞うことだけでなく祭りの担い手としての活躍も会にとって大きな力となっています。

子どもたちは「花祭り」という良い芸能に出会い、舞うことが楽しくて、秋になると集まってきます。御園との交流を通して、練習の厳しさも知りましたが、人々の温かい心もたくさん感じているようです。10年を経過した今、「東京花祭り」が子どもたちの心の中に「大事にしていきたいもの」として成長しているのではないのでしょうか。

(佐藤)

東京花祭りの大人たち < 10年の活動を振り返って >

10年前、子どもたちが始める（という思いのみだったと思う）花祭りを支えるために集まった大人たちは、子どもたちを指導する側と、親としてのお世話係でした。子供たちに舞を教えたり、支えるための準備やお世話で、大人の持つ力を出し合ううち、話し合いが不可欠になり、大人もつながりができてきました。そして、子どもたちが舞の練習をしている周りに集まれば、わが子ばかりが気になってしまう親の不安が話されたりします。すると、みんなも同じように悩んでいたか感じていたことがわかったり、経験からアドバイスしてもらえたりして、子供の成長したいという意欲を見つけれることがよくあるのです。思春期という子どもにとっても、親にとっても、大切な過程を通るとき、その難しい時期を一人の親だけでなくみんなで一人の子どものことを見つめ、理解してあげられることが、どれほど貴重なことが計り知れません。

今では、みんなでみんなの子どもを見つめ育てようという意識が自然にできていると思います。舞の練習や合宿、愛知御園の花祭へとみんなで活動していくなかで、大人としての責任で子どもに接する場面では、いっぱい褒めてやるのが、子どもの自信になり、覚えたり、力になることも多いと思います。しかし時にはその子にとって今が大事と思えば、その子の親でない大人が叱るという場面もあるのです。そして、またそのことで大人同士考えあうのです。

花祭という芸能をとおして集まった大人たちは、子どもたちを育てるというなかから、当たり前のように大人同士のつながりができています。そして大人だって無限に育ちあえるという関係が、地域に広がろうとしていると思います。

（木暮）

5 . 花祭りにかかわって

花祭りとわたし

私と花祭りの出会いは 1990 年の春のことでした。北多摩民舞教育研究会「ダガスコ」のメンバーでもあった人見さん・広木さんの息子さんである穰君が 1 年間の御園山村留学から戻ってこられた時、一緒に上京された尾林威行さん・暁史さんご兄弟が広木家の稽古場で花祭りの舞を舞ってくださったのです。民舞を学校の教育活動に取り入れ、実践している方々の中では、花祭りはまさに『教育の鑑』として信奉され、絶賛されていたので、いつのまにか私も、機会があったら現地を訪れ、本物を見てみたいものだという思いが大きく膨らんでいたのです。ところが、花祭りが行われるのは正月の 2・3 日ということで、なかなか現地に足を運ぶことができませんでした。

初めて『花祭り』の舞を目にした時の驚きは忘れられません。中学生になりたてで坊主頭も初々しい若者達の、今にも鶴が羽を広げて大空に舞い上がろうとしているかのようなゆったりとしたしなやかな舞(確か地固めだったと思います。)は、私がこれまで馴染んできた股を割り、激しいリズムに乗って踊るものとは違うものでした。「民俗舞踊の醍醐味は音と次の音の間(ま)を如何に遊び、楽しむかだ。」と教えていただいた先生から伺ったことがあります。花祭りの舞いは間の取り方が見ていてもとても心地よくまさにその通りだと思いました。すっかり魅せられてしまいました。

御園の方々は次の日行われた、東京民舞教育研究会の『花祭り講習会』の指導者として招かれていたのです。さっそく講習会に参加し、子ども達が舞う「花の舞」から私の「花祭り修行」が始まりました。そして、人見さん・広木さんのご尽力もあり、私達の民舞サークル「ダガスコ」でも直接舞いを教えていただけることになりました。その年から、5 月のゴールデンウィークや夏休みを利用しての御園通いが始まりました。

習い始めたら、その難しさに私達は舌をまきました。まず体の動かし方から厳しく注意を受けました。拍子取りが速すぎてせわしない舞になってしまうのです。御園の先生方の中には 60 歳を過ぎている方々もいらっしゃいましたが、みなさん軽く優雅に舞っているように見えるのですが、足腰の強さは半端ではありません。とくに膝をしっかりと曲げ、ゆったりと拍子をとることができるので舞いが大きくダイナミックです。都会で生活をする我々との違いをまざまざと実感させられました。花祭りの舞は子どもの舞は 20 分弱ですが、大人の四つ舞になると 2 時間近くも舞い続けるものがあります。さらに最後には「からすとんび」と言っとうさぎ跳びをするといったクライマックスもついています。本当に最後まで舞い通すことができるか半信半疑で挑戦しましたが、これが不思議に舞い通せてしまうのでした。肩に余分な力が入り過ぎていたのが次第に抜けてきて、周りで囁す声に励まされ、太鼓に気持ちよくのせ

てもらって舞い通せてしまうのです。舞い終わった後の何とも言えない爽快な気分。体中の凝りや歪みを大量の汗といっしょに洗い流すからでしょうか。この味をいったん嘔み締めると病み付きになってしまいます。なんて贅沢な舞いなのだろうと思います。

あれからもう 14 年もの年月が経ちました。なかなか現地の方々の舞に近づけませんが、少し前までは女が舞うなんて常識では考えられなかったという世界に私達を招きいれ、根気強く付き合いご指導して下さったたくさんの御園の方々。みなさんお一人お一人が素晴らしい舞の名手で、80 歳を超えて今なお現役で見事な舞を見せてくださる方もいます。お一人お一人の舞が、私達の貴重な貴重なお手本です。

「花祭り」は奥三河の村々の宗教的なお祭りです。村の人たちが長い間とても大切に守り、発展させてきたお祭りです。「花狂い」という言葉があるそうですが、どうしてこんなに「花祭り」は今なお人々に深く愛され続けているのでしょうか。夜を徹して行われる花祭り。村の人の中には、へべれけに酔いつぶれながらも、一晩中眠らずに舞手と一緒に舞い、囃して思う存分祭りを楽しむ方々が大勢いらっしゃいます。根っから好きなんです。

村の繁栄を願い神に祈り、奉げるこのお祭りの中には一見封建的に見えるものもありますが、その実、人間生活を楽しくし生き生きとさせる、非常に豊かなものが内包されていると思います。すっかり花狂ってしまった人達が、東京でも「花祭り」を始めてしまいました。かく言う私もその中に入れてもらっている一人ですが、これからも末永く御園に通いパワーをいただきながら、東京でも花祭りを育て、発展させていくという活動の中で、民俗芸能を継承し発展させるという大きな課題と一緒に学ばせていただきたいと思います。

(船津)



6 . 10周年を終えて・・・今後の展望と夢

なるものやらならぬものやら、とにかく始まった第1回「仮称」東京花祭り。そのお誘いのチラシを改めて見てみると、・・・・御園の人々の指導を受け、1年に1度「花祭り」を地域で行うことによって『花祭り』を伝承しその本質を我がものに出来たら・・・・とある。

とにかく10回は続いた。・・・楽しそうに舞う子ども達の姿に励まされて、止めるわけにはいかないと言う思いでここまでやって来たが、みんなの努力のおかげで、10周年は画期的な「花祭り」になった。

西部地域センター広場の野外で舞庭を組み立てて、竈をしつらえて火を燃やし湯を沸かし、その湯を周りの人々に振りまくことが出来た・・・・！

「花祭り」は全くの野外の行事と言うわけではないが、今回、野外の場で行うことによって多くの地域の人々と共有できる可能性が膨らんだと思った。

年々の取り組みの中では「**楽しくやること**」を大事にしてきたが、「**本質に迫った**」場合楽しくなるのだな、と言うことも実感として少し語ることが出来る様になった。

本質とは？ 祭りの本質とは？ 「舞」の本質とは？ 「花祭り」の本質とは？

それらを探るキポイントは、やはり歴史の中にあると思う。

一言で言うと、祭は自治の華であり、人間同士の存在のあかしであり、自然への回帰の行事である。祭の伝統の中にはそれらが凝縮して伝えられている。丁寧にそれらを見つめ直すことが本質にせまる手始めかなと思う。

700年も続けてきたこの「**伝統**」を生きた形でしっかり受け継ぎ、創意と工夫を凝らして我々のものにしていくことが出来て始めて、現代の自治の文化が確立されていくのであろうと思う。

みんなで楽しく仲良くやっていくことが今後とも中心の課題だと思う。

祭の「本質」と共に「花祭りの舞」や「運営」の「醍醐味」を求めて、新しい一歩が始まっている。

(人見)

東京花祭り」会員募集

幼児から大人まで、みんなで参加できる祭りです。一緒に祭りを
楽しみましょう。

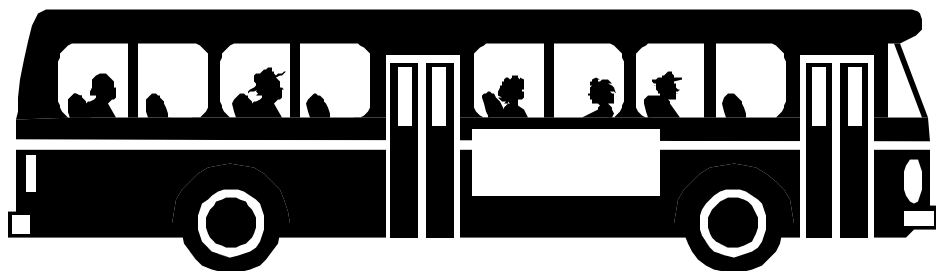
問合せ先 広木 0424 - 73 - 8484



御園花祭へのおさそい

11月8日(土)9日(日)

本場の花祭を観に行きませんか



東久留米九小前からバスが出ます。一緒にいかがですか。御園は静かな山里です。澄んだ空気と人々の優しさにふれて、気分もリフレッシュしてきましょう。徹夜のお祭りですが、仮眠の取れる休憩所も用意しています。帰りはぐっすり休んできましょう。

日程 8日(土) 6:30 九小前出発
9日(日) 20:00頃 帰着予定

申し込み・問合せ先 佐藤 74-8432

御園花祭りへは、東京花祭り発足後は2年目からでかけました。この年は新幹線や各自の車ででかけました。3年目から、バスを出して欲しいとの要望があり、バスツアーとして計画しました、以後毎年続けて、会員のみならず一般の方の参加の機会も提供してきました。おかげで心置きなく夜通し祭りに参加できるようになりました。

2003年度

東京花祭り

12月13日(土) 11時~19時

東久留米市西部地域センター

ホール, 野外広場

問合せ先: 広木 0424-73-8484

交通:

JR中央線武蔵小金井駅、

西武新宿線花小金井駅、

又は西武池袋線東久留米駅下車、

滝山団地・久留米西団地行きバスで

滝山団地センター下車1分